

スマートシティ（AIシティ）とは何か

—会津若松で考える—

開倫塾

塾長 林明夫

Q 1 : 福島県会津若松市へは何をするために出掛けたのですか。

A : 公益社団法人経済同友会地方分権委員会（委員長、市川・住友林業社長）の委員として、アクセントリア福島イノベーションセンター、会津大学、会津市役所を視察し、日本で最先端の「スマートシティ会津若松」を学ぶためです。

Q 2 : 「スマートシティ会津若松」とは何ですか。

A : (1) ICT（情報通信技術）などを活用して、地域産業の活性化を図りながら、安心して快適に生活できる「まちづくり」に取り組む事業の「総体」です。

(2) 会津若松市では、ICT や環境技術などを、健康や福祉、教育、防災、さらにはエネルギー、交通、環境といった生活を取り巻く様々な分野で活用し、将来に向けて持続力と回復力のある力強い地域社会と、安心して快適に暮らすことのできるまちづくりを進めています。

(3) こうした取り組みの総体が「スマートシティ会津若松」です。

*以上は、会津若松市の HP にある「スマートシティ」のコーナーからの引用です。

Q 3 : 会津若松市の「スマートシティ」の取り組みは、参考になるのですか。

A : (1) 試しに、先ほど引用させていただいた会津若松市の HP をご覧になってください。また、HP 中にある「スマートシティ」のコーナーをご一読ください。

(2) そのうえで、今お住いの市や町、区などの HP を検索し、比較してみてください。全国の自治体もかなり ICT の活用の取り組みをしています、会津若松市の取り組みは群を抜いています。

(3) 情報工学の単科大学、会津大学の HP も是非ご覧ください。使い勝手のよさは抜群です。

Q 4 : 「スマートシティ会津若松」の誕生のきっかけは何だと、林さんは考えますか。

A : (1) 2011年3月11日の東日本大震災の復興支援として、世界的な ICT コミュニケーション企業である「アクセントリア」が、日本で東京に次ぐ第二番目のイノベーションセンターを会津若松市に開設したことです。アクセントリアが情報工学の単科大学である「会津大学」や「会津若松市」と、「産学官連携」を不退転の決意で進めた結果と、私は考えます。

(2) 会津大学は、1 学年 240 名の公立大学ですが、知る人ぞ知る、コンピューターサイエンス領域では日本最大の単科大学です。大学発ベンチャーは 27 社、外国人教員比率は 40 %、英語教育も知る人ぞ知るの公立大学です。

(3) これに加え、室井照平会津若松市長と行政スタッフの強力なリーダーシップ、市民の理解のもとで、総務省認定第一号の「スマートシティ」が誕生しました。

Q 5 : 会津若松市の「スマートシティ」から学ぶことはありますか。

A : (1) 大いにあります。「スマートシティ」として会津若松市が取り組んでいる課題は、全国各地と共通するものが大半だからです。

(2) 「スマートシティ」としてベンチマーク、参考にすべきは、エストニアや韓国がありますが、国内では「会津若松」が群を抜いています。

(3) 最先端の ICT コミュニケーションの企業、最先端の情報工学の単科大学、やる気のある行政トップ。これに、「福島復興」という「社会的使命」が加わり、2011 年から 7 年間という短期間で「スマートシティ会津若松」の誕生に至ったと、私は確信します。

Q 6 : 学習塾、予備校、私立学校の経営幹部の皆様にお伝えすることがありますか。

A : 会津若松市や会津大学の HP を十分に研究し、自分たちが取り組むべきことは何かを、お考えになることをお勧めいたします。エストニアや韓国から学ぶことも、山ほどあります。

Q 7 : 最後に一言どうぞ。

A : 今月も、皆様にお読みになれば参考になる本を、僭越ながら、少し多めですが、何冊かご紹介させていただきます。

(1) 1 冊目は、共同通信社原発事故取材班・高橋秀樹編著「全電源喪失の記憶：証言・福島第 1 原発 日本の命運を賭けた 5 日間」新潮文庫、新潮社 2018 年 3 月 1 日刊です。吉田昌郎・所長はじめ、福島第一原発を担ってきた皆様が、どのような思いでどのような行動をなさったかを知ることは、国民として大切と考えます。リスクマネジメント、リーダーシップのテキストとしても第一級の書と確信します。

(2) 2 冊目は、先月号でもご紹介したマイケル・E・ポーター著「(新版)競争戦略論 I・II」ダイヤモンド社 2018 年 7 月 18 日刊です。1999 年 6 月 3 日刊の旧版から 19 年、内容を一新し、論文の入れ替えをした、競争戦略論の第一人者ポーター先生の最新版です。ノートを取りながら旧版と併読することをお勧めすることを失念しましたので、改めてご紹介させていただきます。

(3) 3 冊目は、波頭亮著「AI と BI はいかに人間を変えるのか」幻冬舎 2018 年 2 月 28 日刊です。ノルウェーやフィンランド、カナダなどで実験が始まった BI の導入はまだまだかもしませんが、AI は待ったなしです。本書の前半の AI の歴史とこれからの説明は、とても参考になります。

* BI(ベーシック・インカム)とは「すべての国民に対して、最低限の生活を保証するだけの一定の金銭を無条件に、無制限に給する」制度です。

(4) 4 冊目は、山本龍彦編著「AI と憲法」日本経済新聞出版社 8 月 23 日刊です。AI の具体的な展開が、憲法や基本的人権とのかかわりでよく理解できる好著です。

- (5) 5冊目は、寺西重雄著「日本型資本主義—その精神の源」中公新書、中央公論新社 2018年 8月 25日刊です。日本資本主義の淵源を鎌倉時代における仏教の革新にまで遡り、「求道的職業行動に基づく独自の資本主義精神」があったとする指摘は、マックスウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」を思い起こさせます。
- (6) 6冊目は、ena 学院長・河端真一著「3万人を教えてわかった 頭のいい子は『習慣』で育つ」ダイヤモンド社 2018年 7月 18日刊です。最強にして最高の教育論・テキスト・必読書として、すべての学習塾、予備校、私立学校の先生にお勧めいたします。
- (7) 7冊目は、牛久市の最年少の教育委員会委員長を務めた後、早稲田大学大学院教育学研究科で教鞭をおとりの永堀宏美著「保護者トラブルを生まない学校経営を“保護者の目線”で考えました」教育開発研究所 2018年 8月 6日刊です。実務と研究に裏打ちされた、活用度の高い1冊です。学習塾や予備校にも役立ちます。
- (8) 8冊目は、アレックス・ライトマン著「ブレット・キング 拡張の世紀—テクノロジーによる破壊と創造」東洋経済新報社 2018年 4月 12日刊です。モバイルバンキング、フィンテックの世界的権威が ICT によるイノベーションの現在と将来を語ります。(3)(4)とともにご一読ください。
- (9) 今月の最後の 9冊目は、内閣官房参与で総理大臣の外交スピーチライターの谷口智彦著「安倍晋三の真実」悟空出版 2018年 7月 30日刊です。谷口氏とは、ダボス会議の東アジア版 World Economic Forum in East Asia で何回もご一緒し、日本の国益を考えて発言する姿に感銘を受けていました。本音の安倍首相論です。
- 是非、手に取ってご一読ください。

2018年 8月 31日 (金) 11時 12分